

ラスト・ダンジョン 2  
～恋は天下の回りもの!?～  
*R i m i & K a z u o m i*

---

広瀬もりの  
*Morino Hiroe*

termity



エタニティ文庫

目次

恋は天下の回りもの!?

5

終わりよければすべてよし

283

恋は天下の回りもの!?

三月。

気の早い若者たちが軽装で街に繰り出す季節。

「カネヲ貿易」本社ビルの営業フロアは、相変わらずの慌ただしさだった。英語はもちろん、そのほかのよくわからない言語が入り乱れる営業電話。書類を手に右へ左へ走る社員、次々とかかってくる内線呼び出し。

あちこちから絶え間なく雑音が飛び込んでくる中、私、若菜梨実わかなりみは今日も大量のデータ処理と格闘していた。分厚い伝票を一枚ずつめくりつつ、該当の数値を次々と入力していく。

うーん、我ながら惚れ惚れするほどのハイペース。初めてこの仕事を任されたときには、あまりの量に呆然ぼうぜんとしたものの、派遣されて四ヶ月も経てば顔色を変えずにテキパキ片付けることができる。

そう、お陰様でお試し期間の一ヶ月を難なくクリアし、その後も同じ部署で働き続け

た結果、今週末には最初の派遣更新を迎える。このままいけば継続契約間違いなしだってお墨つきをいただき、ホッとしたところだ。

——ほらっ、そんなことを考えているうちに、最後の一枚！

伝票の枚数とセルナンバーも、当然ながらびつたり一致。これくらいの分量でミスが出るようじゃ、勤まらないものね。

さてさて、次は見直し作業。でもその前に、ちょっと一息入れるかな。

私は椅子の背もたれに寄りかかり、両手を挙げて大きく伸びをした。たまにはこんな風にストレッチをしないと、一日が終わる頃には身体じゅうの関節がヤバイことになってしまう。

ふと横を見れば、地上十六階の窓から眺める空は、どことなくぼんやりと春霞はるがすみ。はっ、本当に冬が終わったんだなとしみじみする。

そう、凍こてつく季節が終わったのは、なにも窓の外だけの話じゃない。

この「カネヲ貿易」も一時はかなり危ないところまでいったんだ。今となつてはすべて夢だった気もするけど、これはホントにホントの話。

従業員の首切りは免れない、なんて噂が飛び出したときには、正直「終わった」って思ったよ。だって、一番先に標的となるのは、私たち派遣社員に決まっているもの。どうにか、首の皮一枚で繋がっていられたのは本当に幸いなことだ。

とにもかくにも、元どおりに忙しくなって良かった。

次から次へと仕事が渡されて、それを必死で片付けていると一週間なんてあっという間。こんな風に過ごせることも「幸せ」なんだとつくづく思う。とはいえ、二ヶ月、三ヶ月と風のように時が過ぎていくと、さすがにこのままでいいのかわかって気もしてくる。「あれーっ、若菜さんもトイレ?」

廊下に出たところでうしろから呼びかけられる。

「うん、髪の毛がすごいことになってるから、一度直さない」と

そう答えてつつ振り向くと、立っていたのは派遣仲間の山口さん。最初の頃にあれこれと世話を焼いてくれた彼女とは、今でもとても仲良しだ。私たちはジョシコーサーのよくなノリで、連れ立ってトイレに入っていく。

「そっかー、一心不乱に頑張ってたもんね。今日の若菜さん、鬼気迫る働きぶりだよ」  
そして彼女は、まじまじと私を見つめる。

「正確には今日に限らず、このところずっと。なにか、悩みごとでもある? 眉間にね、思いつきりしわが寄ってるよ」

「えっ、嘘!」

思わず、トイレの鏡を食い入るように見つめてしまった。

「もしも困ってることがあるなら、遠慮なく相談してね。約束だよ! 私、若菜さんと、

ずーっと一緒に働いていたいんだから!」

うわっ、いきなり両手をぎゅっと握られちゃったりして。私、すごく愛されてる? いやいや、残念ながらそっちの趣味はないんだよなあ……とか、思っていたら。

「だって、若菜さんがいなくなったら、誰から吉田さん情報を聞き出せばいいの。次に吉田さんのサポートになった人が、思い切り口の堅い人だったら大変でしょうっ!」

……ああ、やっぱりそんなところか。

ここは喜ぶべきか、それとも悲しむべきか。まあ、それはどっちでもいいから横に置いておいて。

今、話題にのぼった「吉田さん」という人物。

彼のフルネームは吉田和臣、年齢は二十八歳。我が営業部で常にトップクラスの成績を収め、部署内に留まらず、本社すべての女性社員の憧れの的となっている。さらに社長をはじめとする上層部からの信頼も厚い。とにかく、やたらと目立つ男なのだ。

そんな彼のサポートをしている関係で、私の周りはいつも騒がしい。

彼が新しいネクタイをしてくれば「あれは誰にプレゼントされたのかしら?」と噂になり、コロンの香りが変われば「きっと新しいお相手の登場ね」とまことしやかにささやかれる。

そんなの、私にとってはどうでもいい話なんだけどなあ……

はあ、それにしても。

やっぱり、気持ちがピリピリしているのがバレちゃってたか。眉間を指の腹でこすりながら、ちよつと反省する。

ありがたいことに、山口さんもそれ以上突っ込んでくるつもりはないらしい。持っていたポーチからリップパレットを取り出し、ささっとグロスを塗り直している。

「それはそうと。見た？ 平野<sup>ひろの</sup>さん。朝から、すつごくご機嫌なの。さつき、書類の訂正箇所を確認しに行ったら、なんと鼻歌まで口ずさんでたよ！」

「えーっ、それってホント？」

「うんうん、あれてて絶対に、噂の彼氏絡みだね」

これから頑張って情報収集するという彼女の背中では、闘志がみなぎっていた。さすがは部署内一の噂好き。こんな山口さんの姿を見るたびに私は思う。コイツだけは、絶対に敵に回してはならないと。

以前、まったく関係のない男性社員との仲を疑われて、散々な目に遭<sup>あ</sup>ったこともあるんだから。もうあんなことは二度とゴメンだわ。

「じゃ、あと数時間、お互い頑張ろう！ そうだ、そろそろ吉田さんが取引先から戻る頃じゃない？ 今からコーヒーいれてたら丁度かな。えへへ、お帰りなさいの一杯をお出しできるかもっ！」

も、もしかして、そのためのメイク直しだったの!?

「ふっふっふっ、千里の道も一歩からって言うでしょう？ こういう地道な積み重ねが、いつか大きな恋の花を咲かせるのよ。どう、たまには若菜さんもチャレンジしてみたら？ 今日特別に譲ってあげてもいいわよ」

「え、私は遠慮しとくわ」

相変わらずだなあ、山口さん。そりゃ、ウチの部署に限らず、吉田さん狙いの女子はごまんといえるけど、その中でも彼女は押せ押せモード全開だ。

「そう？ 本当に若菜さんは欲がないのねえ。そんなことじゃ、いつまで経っても春が来ないわよ」

気合い入りまくりな口元を引き締めて、山口さんは笑う。

あの調子のいい男がへらへらと愛想を振りまくから、こんな事態になってるんだ。まったく、いい加減にしないと今に大変なことになるよ。

「が、頑張ってね……」

Vサインをきめて去っていく背中を見送った後、私はどつと脱力していた。

噂の張本人が戻ってきたのは、それから五分後。

「ただいま、帰りました」

山口さんタイマーは、びつたりの中。彼女はコーヒーの入った紙コップを憧れの君に手渡し、ご満悦だ。笑顔で「ありがとう」と言われて、目がハートマークになってる。

彼が身につけている今日のスーツはイタリア製ブランドの最新モデル。すらりと長身のボディに完璧なほど似合っている。あくまでも自然に整ったように見える髪も、ここへ戻ってくる前に念入りにチェックしたと思われる。

いつものことながら「見られる」ことをはつきりと意識している立ち居振る舞い。フロアの女性社員の目が帰社した自分に一斉に集まってることだって、絶対に気づいてるんだよ。わかって、さりげなくしているところが鼻につく。

彼が真っ先に向かうのは、もちろん平野さんの下。

「平野さん、太田工業の新設工場の機材発注、すべて予定どおりです」

彼女は我が営業部二課をまとめ上げている陰の元締めだもんね。誰よりも先に報告するのは当然のことだ。

なにしろ、ウチの課長、自分の持ち場にいることが本当に珍しい。気がつくとな役のご機嫌取りばかりしてるんだから、なんのために会社に来ているのか、嘆かわしい限りだ。そんな有様であるにもかかわらず、ここの部署がきちんと機能しているのは、すべて平野さんの努力のたまものと言いつつ切ってしまうといい。

うしろですつきりとひとつにまとめた髪と横長フレームの眼鏡がトレードマークの彼

女は、満面の笑みを浮かべる。

「そう、さすがは吉田くんね。今回は大口の注文だから、これが取れたのは大きいわ。

納入する機材の性能は間違いないし、もしかしたらさらなる追加注文も期待できるかも」  
彼女は両手で握り拳を作り、熱弁をふるう。

……ホントだ。普段からは考えられないオーバーアクション。

そりゃ、吉田さん相手なら、かの平野さんの類も必ずほころんでいるけど、今日はその緩み加減が半端ないぞ。

「その話が本当になったらすごいですね。今年上半期の社長賞は我が部署で決まりかも知れませんかよ」

うわーっ、コイツ、またとんでもない大風呂敷を広げてるし！ 本当に口八丁の男なんだから、見てるこっちがハラハラしちゃう。

「まあっ、素敵！ 吉田くんの方で、是非実現して欲しいわー！」

ハートマーク乱舞な声と、たくさんの羨望の眼差しに見送られながら、彼は涼しい顔でこちらへと歩いてくる。そして私のデスクの脇を通り過ぎるときに、意味深な表情を浮かべるのはいつものこと。

ええ、思い切り無視してやりましたから。こっちだって忙しいんだから、いちいちあなたの相手なんかしていられませんって……！

「だけど、姿勢を正してふたたびデータチェックに入ろうとしたとき、向かいの席から声がかかる。

「ねえ、若菜さん。ちよつといいかな？」

ほらほらうつ、また出たよ、お得意の「にやり」が。まったく、馬鹿にしないでよ。それくらいのこと、動じる私じゃないんだから。

「はい、なんででしょうか」

「早速で悪いんだけどこの書類、数ヶ所の訂正をお願いしたいんだ。ほら、こここここの性能比較。一時間あたりの数値で計算し直せる？ その方が、先方にもわかりやすいと思うんだ」

ふむふむ、それくらいならたいした手間じゃないわ。電卓叩けばあつという間だよ。

「わかりました、お預かりします」

ファイルや書類の山の間から腕を伸ばして、差し出された書類を受け取る。それ自体は、なんでもないことのように思えたんだけど――

「うん、なるべく早く頼むよ」

……ちよつと、待て。

なんで、書類に隠れて素早く人の手を握りしめるかな。しかも、偶然触れたって感じじゃないよ。これって、絶対わざとやつてるよね？

「はっ、……はい！」

いきなりの襲撃に必死で応戦しようとしたら、乱暴に書類を奪い取るみたいになってしまった。ばさつと大きな音が立って、周囲にいた何人かが振り向く。

「え、えーとっ！ では、早速……」

ひいひいっ、そんな不審の目を向けないで！

私っ、なにも悪くないから。あつちの男が失礼なだけだから。見ないで、こつち見ないで、お願いだようつ！

心の中でいくつもの言い訳の言葉を叫びつつ、私はそそくさと席に着く。一息ついてから顔を上げると、はた迷惑な男はにやにや笑いながら楽しそうにこつちを見ていた。

――まったくっ、いい加減にしてよね……！

そう。

目の前のデスクに座る「敏腕営業マン」の肩書きを持つ吉田さん。そして彼のサポーターとして書類作成ほかの雑用を一手に引き受ける派遣社員の私は、人目を忍ぶ恋人同士。ふたりの関係は社内では絶対に秘密。いや、彼の方は公にする気満々なんだけど、それだけは断固阻止したい私が必死で口止めしている。

だって、見なさいよ。彼の一挙一動を追う、フロアの女性社員たちのこの熱い眼差しを。もしも彼に特定の相手がいるなんて知れたら、とんでもない騒動になるわ。矢面に



立たされる私の立場になってごらんさいっていうの！

なのになのに、この男ときたら。

そんな私の切実な思いを知っているくせに、職場でもやたらとちょっかい出してくるんだから許せない。

今みたいに書類に隠れて手を握るなんて日常茶飯事。コピー室でうしろから抱き締められたり、非常階段ですれ違いざまにキスされたり、まったく油断も隙もあつたもんじやないわ。

なにか「どこまでもクールで爽やかな吉田さん」よ。そんなキャッチフレーズ、ビリビリに破いてくしゃくしゃに丸めて、ゴミ箱にポイするから。

心の中ではプリプリと怒りつつも、私は先ほどのデータ入力の確認を始めた。早いとこ、こつちを片付けないと、次の作業に取りかかれない。

「おーっ、吉田くん！ 良かった、戻っていたか」

そのとき、慌てた様子で飛び込んできたのは、田之倉課長。いつもながら神出鬼没、今までどこに潜伏していたのか、その行動がまったく読めない人だ。

先日もやたら大きな箱を抱えて歩いていたので、それは何かと訊ねたら、広報部の部長のお孫さんへの誕生日プレゼントだと教えてくれた。そういうことを包み隠さず堂々とできちゃうところは、ある意味尊敬できるかなと思う。ただし、見習いたいとは思わ

ないけどね。

「はい、なにかご用でしょうか」

名前を呼ばれた吉田さんはさっと立ち上がる。

フロアにいるほぼ全員から冷やかな眼差しを向けられている課長に対し、ただひとり親愛に満ちた笑顔を向ける男。まったくもって、コイツの外面の良さは表彰ものだ。

「とにかく、急いできてくれ！ 販売部の野口部長が呼びだ」

こういうときだけ上司面しようとするのが田之倉課長。彼の忠実な部下を演じる男は、すぐにその言葉に従う。

「はい、承知いたしました」

「もちろん、私も一緒に行こう。吉田くんひとりでは心細いだろうからな」

そんな言い草、真に受ける人間はこのフロアにひとりもない。

課長はただ、上層部に自分を売り込みたいだけ。そういう本音が顔にびっしりと書いてあるもの。

「じゃあ、若菜さん。あとのことは頼んだよ」

もちろん、私のデスクの脇を通り過ぎる際には、軽くボディタッチ。風のような早業だったから、誰にも気づかれなかったと信じたい。

『今日の夕食はいりません』

短かすぎるメールが届いたのは、その日の仕事上がり。

まあ、そんなことだろうとは思ってた。課長に連れ去られた彼は、それきりフロアに姿を見せなかったから、きつとまた面倒ごとにも巻き込まれたんだらうって。

ただでさえ人の二倍も三倍も働いているのに、行く先々でやたらと重宝がられてさらに仕事をもらってくる。それで全部を滞りなくこなしてしまうのだから、普通じゃないよ。

「……それなら、こっちも好きにさせてもらおうわよ」

物言わぬ携帯に話しかけたあと、ぱちんと閉じる。そして向かうのは、もちろんいつもの場所だ。

「あーっ、りみちゃん！ いらっしやういっ！」

妹夫婦が暮らす官舎。姪っ子のわかばが毎度の熱烈歓迎をしてくれて、ちよつとこそばゆい。でも、そのすぐあとで、彼女は私のうしろをのぞき込む。

「あれーっ、かずくん、いっしょじゃないの？ そんなあ、つまんないーっ！」  
うわっ、いきなりそうきましたか。

「そういうことを言う悪い子には、お土産をあげませんからね！」

まったく、どいつもこいつも腹黒男にころりと騙されちゃって。こっちはただでさえ

虫の居所が悪いんだから、さらにプリプリしちゃうよ。

最初のうちは「おじちゃん」とか呼ばれてシヨックを受けていた彼も、最近ではどうにか名前前で呼んでもらえるまでに昇格した。そのためにお菓子やおもちゃでつつたり、積極的に子守を引き受けたりと、涙ぐましい努力をしてたけど。

「お姉ちゃん、いらっしやい。さ、上がって上がって」

少し遅れて玄関先に現れた妹、花美かみの背中には生後七ヶ月の甥っ子がくくりつけられている。赤ん坊もすぐに私の存在に気づき、奇声を発して手足をバタバタさせた。

「はいはい、……ちよつと待って」

子供の成長はとても早い。ついこの間まで座布団の上で大人しく仰向けに転がっていたはずの赤ん坊が、今では床を自由自在に這い回る。どこかに固定しておかなくては、食事の支度もままならないのだろう。

しかも、姉のわかばの方は、やんちゃ盛りの年頃。おまけに、とにかくおしゃべり。朝から晩まで機関銃のように話し続けている。適当に返事をしていると、本気で怒り出すしね。こんな子供たちの相手をほとんど一日中ひとりである妹には本当に頭が下がる。

だけど、ホツとするな。

ここでは吉田さんの仲を隠す必要もないし。いろいろ相談したりグチったり、思う

存分ストレスを発散させてもらってる。もちろん、今夜だって例外じゃない。私はほかの誰にも言えない悩みを、次々と妹にぶちまけた。

「そっか、吉田さんの実家に行くの、いよいよ今週末なんだ。頑張ってるね、お姉ちゃん！」  
しかし相手はなかなかの曲者くせもの。というか、デフォルトでのほほんとしている妹に、的確な慰めの言葉を求めること自体がそもその間違いだった。

「あのさーっ、頑張るって、どうやってよ！」

そう、派遣仲間の山口さんにも指摘されてしまった、ここ最近の私の悩みの種はこれ。去年の暮れからことあるごとに「是非一度お越しください」と言われていたのを、会社でゴタゴタしていることを理由にずっと先延ばしにしていた。だけど、その言い訳もそろそろ苦しくなってきた。

「でもお姉ちゃん、吉田さんのお兄さんやお姉さんとは仲良しなんでしょ？ だったら心配することなんて少しもないじゃない。それに、吉田さんは跡取りではないし。次男の嫁だったら、気楽なものよ」

三つ年下でありながら、こともなげにそう言えるのは、彼女自身が「次男の嫁」であるからなのだろう。

外務省勤務のだんな様のご実家は北海道で、仕事の都合もあつて帰省できるのは二年に一度くらいとか。あつちの両親が上京してくることがあつても、この狭い官舎に泊めるわけにはいかず、近くのホテルを利用してもらってるそうだ。

次男の嫁ならば、だんなの実家ともつかず離れずの関係で上手くやっていける——というのが、妹の経験に基づく持論。まあそれも、天然で大らかな性格の彼女だからこそできる業わざじゃないかなとも思うけど。

「まあ、……それはそうんだけどね」

ちよこまかと膝ひざの上を乗り越えて先に進もうとする甥っ子を制し、私は大きいため息をつく。

「だけど、その実家ってのが普通のトコじゃないし……」

妹も、ああそうかとばかりに大きく頷く。

「確か吉田さんのご実家って、一族で旅館をいくつも経営していらっしやるんだっけ。地元でもかなり名前の知れた老舗らひとか。けどいいじゃない。そんなゴージャスなご実家があるなんて、羨ましいなあ。古き良き町並みが残る小京都、美味しい食事に観光旅行まで一緒に楽しめるなんて最高だよ」

私としては、花実のこのポジティブ思考が羨ましい。

「こういうのって待ってる間は不安ばかりが募るけど、思い切って飛び込んでみれば拍子抜けするほど簡単だったりするじゃない。あの吉田さんのご両親だもの、すごくいい方々に決まってる。お姉ちゃんのことだって、きつと大歓迎してくれるよ！」

妹は景氣づけとばかりに力強くテールを叩いたところで、ふっと表情を変える。「それに、吉田さんはウチの両親に本当に良くしてくれていると思う。月に二回は訪ねてくれてるでしょう。お正月だって、元旦しか休みがなかったのに、お年始に来てくれただよだね？ お父さん、すごく嬉しそうだったよ」

「う、うん、それは確かに」

吉田さんはウチの実家がとても気に入ってしまって、半日オフになっただけですぐに行きたがる。本当の息子ができたみたいだと喜んでる両親の姿を見ると、実の娘としては軽いジェラシーを覚えるほどだ。まあ、勝ち負けを競うものではないけれど。

「年末年始にも帰省できなかったんだから、あちらのご両親はとても寂しがっているんじゃないかな。たまの親孝行なもの、お姉ちゃんも協力してあげなくちゃ！」

そうだなあ、悔しいけど妹の言うとおりかも知れない。

吉田さんのご両親が私たちのことをどこまでご存じなのかは知らないけど、このまま知らんぷりしているのも良くないよね。

わざわざご挨拶に伺うなんて、すごく大袈裟なことのよう<sup>おもげ</sup>に考えていた。でも、もしかするとあまり堅苦しく構えることはないのかも。吉田さん自身も「ちよっとした旅行感覚で」とか言ってるし。まあ、実際に行ってみないとどうなるかはわからないけどね。「う、うん。とにかく頑張ってみるわ」

そろそろ、私も腹をくくるべきか。なんとなく、そんな気がしてきた。

## 2

だがしかし、そうは問屋が卸さなかったんだよね。

「えええっ！ いきなりアメリカ出張って、どういうことですか！」

その日遅く、日付が替わる頃になってようやく戻ってきたこの部屋の主は、<sup>あつじ</sup>玄関先まで出迎えた私にとんでもない爆弾発言をしてくれた。

「ええと、それが……販売部の部長だけじゃなくて、取締役や社長まで出てきて直々に頼まれてしまった。どうにも断り切れなかったんだ」

聞くところによると、どうも現地で商品取引の交渉に当たっていた社員がとんでもないミスをしてかしたらしい。それで取引先がカンカンに怒ってしまい、「とにかく吉田をよこせ、彼と直接話したい」と言っているとか。

昼過ぎに課長と出て行ったきり待てど暮らせど帰ってこないと思ったら、こんな話が進められていたのね。

「僕、先方の営業部長にすごく気に入られているんだ。だから僕が現地に出向いて直接

交渉すれば打開策が見つかるかも知れないって、社長から拌み倒されて。なにしろ、大口の取引先だから、今あそこから切られるのはきついんだよ」

まあ、なんとなく話はわかる。吉田さん、その手の駆け引きとか相手の懐ふところに飛び込んでいくのとかすぐく上手そうだもの。なんせ、あの石頭なウチの母親をいっぺんに手はずけたんだもん。本当にすごいんだ。

「でも、明日の午前中の便であちらに向かうということは……」

「うん、……そうなんだよね」

今日は水曜日、とんぼ返りをしたって週末に帰国はできない。それに話を聞く限り、そう簡単に片の付く話でもなさそうだ。

そういう理由なら、実家行きが延期になっても仕方ないね。吉田さんのご両親もわかってくれるだろう。

「なーんだ、せっかく覚悟を決めたのに」

さあ、そうとわかれば仕切り直し。とりあえず、夜食の準備でもしようかな。

急に足取りが軽やかになっちゃう自分が素直すぎて嫌だけど、悩みごとがちよつとでも先送りになるのはやっぱ嬉しい。

「……それが、梨実ちゃん」

くるりときびすを返してリビングの方に歩きかけたところで、すぐに呼び止められる。

「その、さつきこのことを電話したら……兄さんが、そういうことなら梨実ちゃんだけでもいいから来てくれて」

ものすごく遠慮がちな声だったけど、私はすぐさま反応した。

「えええつ、なにそれっ!？」

「僕たちが行くことで、料理の仕込みとかいろいろしてくれてるみたいなんだ。今さらそんなこと言われても困るって、すごい剣幕で……」

——ちよつと待て。もしかして吉田さん、完全な弱腰モードに入ってますん？

「それで、きっぱり断ってくれたんでしょね」

冗談じゃない、ふたりでも腰が引けるような場所に、なんで単独で乗り込まなきゃならないの。そんなの絶対無理だつて。

それなのに、いきなり弱虫くんに変貌へんまうした彼は、頼りなさ全開の口調でお願いポーズをとる。

「ええと、……梨実ちゃん、どうにか頑張ってもらえないかな?」

こーいーつーはーっ!

「嫌ですつ、断固としてお断りします!」

まったくつ、そんな話はエイプリルフルだつて許されませんって。どこのどいつが同棲相手の実家にひとりで乗り込む勇氣を持てるつて言うの。

「あのね、吉田さん。ちよつとは私の立場も考えてください、そんなの無理に決まっているでしょう！ 嫌と言ったら嫌！ 今回ばかりはどんなにお願いされたって、ぜーったいに駄目ですから……！」

この男って、頭がいいのか馬鹿なのか、ときどきわからなくなることがある。オフィスではさすがの切れ者で通っているのに、プライベートモードになると急変するんだもの。

そのたびに私がどれだけ苦労してきたことか。だけど駄目、今度ばかりはなにがあっても首を縦には振らないわ。

「そ、そこをなんとか。あつちには兄さんも睨あきこ子さんもいるし、困ったときにはちゃんと助けてくれるって。だから、このとおり！」

「嫌ですつ、なにがあっても無理なものは無理！ ちよつとはこつちの立場も考えてください」

いくら、吉田さんのお兄さんやお姉さんの睨あきこ子さんとは顔見知りでも、それとこれとは話が別。あのおふたりは営業や会合で頻繁に上京してきていて、そのたびにこのマンションをホテル代わりに使ってる。だから、顔を合わせる機会はたびたびあった。

それも当然のことで、このマンション自体が吉田さんのお父さんが所有する不動産。ようするに家族にとつては共有の財産なんだ。

あ、そういえば。吉田さんが実のお姉さんである睨あきこ子さんを名前で呼ぶ理由。どうもご本人から「その方が年齢不詳っぽいイメージで若く見られるから」と要望されてるらしい。

「あのね、吉田さん。恋人の実家に挨拶あいさつに行くっていうのは、それなりの意味があることなんです。最初に私の実家に来てくれたときのこと、覚えているでしょう？ ウチの母親、吉田さんのことを頭のとっぺんからつま先まで舐めるように品定めしましたよ。それを今度は私がやられるんです。ひとりつきりではとても乗り越えられる場面じゃないです！」

あああ、想像しただけで鳥肌が立っちゃったよ。

いまだにお目にかかったことのない吉田さんのご両親、いったいどんな方々なんだろう。地元でも一目置かれる老舗旅館しほを経営しているんだもの、通り一遍の人間であるはずはない。しかも吉田三兄弟を育てた人たちなんだよ。

「でもつ、梨実ちゃん——」

「なにがなんでも行きたくないとか駄々をこねているわけじゃないでしょう、ただ最初だけはどうしてもふたりで行きたいんです。そこ、わかってくださいって！」

私はもう必死だった。あんまりに必死すぎて、少し泣けてきちゃったくらい。

「吉田さん、言ってくれたでしょう。これからはずつと一緒だって。もしも私が逃げた

ら世界申どこへでも追いかけるって、そう言ったじゃないですか。それなのに、私ひとりに大変なことを押しつけて、自分の方が遠い国まで行っちゃうってどういうこと？ そんなの、絶対に納得いきません」

覚悟を決めたつもりだったのに、全然そうじゃなかったみたいだ。私の心の中は、今も迷いでいっぱい。もしも今回の局面を乗り越えられなかったらどうしようって、不安で押しつぶされそうになっている。

「お願いしますから、今回だけはきっぱり断ってください。その上で、吉田さんが帰国したら改めてお伺いしますって。それでいいじゃないですか、どうしてそれじゃ駄目なんでしょうか……！」

今度こそは「わかった」って言ってくれるはず。

そんな期待を込めて見つめた彼の顔は、すごく悲しそうだった。

「それが……梨実ちゃん」

吉田さんは少し乱れた髪を静かにかき上げる。

もしかしたらって、ちょっと思った。

吉田さん自身も社長たちの前ではこんな風にして、必死にアメリカ行きを断ろうとしてくれたのかなって。だけど、どうしてもそれが無理だったから、すごく落ち込んでいるのかもって。

常に余裕を持つてすべてのことをこなしているように見えるけど、あんなに大変な仕事を続けているんだもの、きつと辛い局面はたくさん味わっているはずだ。

「兄さんが……もしも今回の話を断るなら、会社を辞めて地元に戻ってこいって言うんだ。というか、もう僕たちが今の会社にいられないように裏から手を回すって」

うわーっ、そうきましたか。

「まあ……これは、今までずつと誘いを先延ばしにしていた僕がすべて悪いんだけど、兄さんもうとうとう堪忍袋の緒が切れちゃったみたいで……」

でも確かに。あの吉田兄だったら、それくらいのことを簡単にやりそうだ。

「だ、だけど、それとこれとは——」

一緒にできません、って言いたいところだけど、そうはいかないのが吉田兄なんだよな。あの人が、敵に回したら半端なく恐ろしそうだし。

「僕からも、兄さんと暁子さんにはよく頼んでおくよ。僕の代わりに、しっかりと梨実ちゃんを守ってくれて。だから、大丈夫。……絶対に大丈夫だと、思う」

最後の方はやっぱり少し自信なげに。でも、この言葉は間違いなく彼の心からのものだ。それくらいはわかるよ、私は仮にもこの人の恋人なんだから。

「……知りませんよ、自分のいないところでとんでもないことになったって」

この軟弱男と付き合っていれば、行くところトラブルが付きまとうのは当然のこと。

とくに身内関係だと、いつもの勢いは何処へやら。いきなりヘタレ男に変身だ。  
 「私がもし、吉田さんのお父さんやお母さん、そして旅館の皆さん全員からとんでもなく嫌われちゃったとしても、吉田さんだけは私のことを嫌いにしないでくださいね。それだけ約束してもらえるなら……」

この数ヶ月で、私もずいぶんと図太くなったと思う。ちょっとやそつこのことじゃへこたれない精神は、こうやって努力の積み重ねで培われていくものなんだね。

「りっ、梨実ちゃんっ！」

なんで、ここで子犬のように目をウルウルさせるかな。はつきり言って、反則だ。

「わ、私、それじゃあ、夜食の支度を……」

なんか急に恥ずかしくなって、私は彼に背中を向けた。ロマンチックなムードってどうも苦手、性格的に受け付けないみたい。

「ありがとう、恩に着るよ！」

ぎゃーっ、それなのに、いきなりうしろから抱きついてくるし！

「ちよっ、ちよっと！ 吉田さんっ、スーツが皺しわになるからやめてください！」

うわわっ、あつという間に半分脱がされてる。待って、待って、こんなの不意打ち！ いくらセントラルヒーティングで室内すべてが年中快適な温度になるとはいつてもね、玄関先でこの状況はまずいと思うんですけど。

しかも、背後の男は、全然見当違いのところを突っ込んでくる。

「梨実ちゃん、ここはオフィスじゃないよ？ そんな野暮な呼び方はやめて欲しいなあ……」

そして、当然のように私の顎あごに手をかけてきた。

「ふたりきりのときは、僕のことをなんて呼ぶの？」

息がかかるくらい顔を近づけられて、じーっと見つめられる。正直、この状況は何度経験しても慣れることができない。

「えっ、ええと……和臣、さん」

「はい、正解」

嬉しそうに微笑んで、まずは鼻先に軽くキス。それから、甘く誘ってくる。

「ねえ、梨実ちゃん。早くベッドに行こうよ」

「えっ！ でも、明日も早いなら、それどころじゃないでしょう。荷造りだって、しなくちやだし」

早春の海外だよ、いったいなにをどれくらい持って行けばいいのやら。まあ、吉田さんは慣れているから見当がついているかもしれないけど、同居人としてはやはり気になるところで……

「そんなの、あとからどうにでもなるよ」



しかし、彼は私の制止なんて全然聞く気もないみたい。「だって、僕たちはしばらく離ればなれになっちゃうんだよ？ 今夜はそのぶん、たっぷり仲良くしておかないとね。途中で充電が切れたら大変だから」

「もうっ、またそんなこと言っつて！」

「……嫌なの？ 梨実ちゃん」

あーっ、まただ。  
この、なにかを強く訴えかけるような切ない眼差し。私が断り切れなくなるってわかってやっっているに違いない。

「そ、それは……別に嫌っつてわけでもないけど」

確かにね、何日も会えなくなると思えば正直寂しい。たった一日二日の出張で留守にされるだけでも調子狂っちゃうのに、今回はどんなに短く見積もっても一週間はかかりそう。

「良かった、じゃあ決まりだね」

その台詞せりふとともに、私の身体がふわっと浮き上がる。

そう、いわゆる「お姫様抱っこ」。最初にやられたときはかなり驚いたけど、毎度毎度のことだから、今ではだいぶ慣れた。でも、気恥ずかしいことには変わりない。

「梨実ちゃん、ボディシャンプー変えたの？ すごくいい匂いにするよ」

そんな風に首筋から胸元にかけてをくんくんされても、逃げることもできないから困る。そうしてはいるうちに胸元はすっかりはだけられて、ふたつの膨らみの谷間を彼の舌がねっつとりと這っていく。

「あんっ、もう……駄目っ、そんな風にしたら——」

「ふふ、梨実ちゃん感じる顔、本当にいいね。たまらないな」

そんなこんなで、あつという間にベッドルームに到着。片手でベッドカバーを外しつつ、危なげなく私をシーツの上に降ろす器用さには、毎度のことながら舌を巻く。

「明日からホント、寂しいな。いっそのこと、梨実ちゃんも一緒にアメリカまで連れて行ければいいのに」

「無理に決まっつてますよ、遊びに行くわけじゃないんだから」

スーツにネクタイにワイシャツ。そして、靴下にストラップス。

次々と身体から剥ぎ取つて乱暴に床に投げ捨てていくだけなのに、たまらなくセクシーに思えるのは何故だろう。

「やだな、そんなに見つめないで」

照れ笑いを浮かべつつ、私に覆おほい被さってくるその姿にまで魅せられてしまう。

「べっ、別に見つめてなんか——」

「オフィスでの梨実ちゃんは、トゲトゲしててすごく怖いんだもん。せめてこういう

ときだけでも優しく包み込んで欲しいなあ……」

そう言いながら、いきなり唇を重ね、深く舌を絡ませてくる。激しさと緩やかさを巧みに織り交ぜられて、あつという間に取り込まれてしまうのが悔しい。

「いつも意地悪ばかりなのは、吉、……いえ、和臣さんの方でしょう」

「えーっ、そんなことないよ」

私の胸に顔を埋めて、彼はくすくすと笑い声を上げる。

「僕は梨実ちゃんに夢中だからね。梨実ちゃんに喜んでもらうためなら、どんなことだってできるよ？」

まったく、どの口が言うのやら。

日常的にオフィスであんなことされちゃ、こっちの心臓が保たないわ。フロアにいる女性従業員はもれなく吉田さん狙いなんだから、特定の相手がいるなんて知れたら最後、どうなるのかわかったもんじゃない。

ただでさえ、オフィスのみんなからは一日に何度も質問されるんだよ。

『吉田さんはいったいどんな女性が好みなんだろうな』

『髪型とかメイクとか、そういうのだけでも彼の好みがわかったらいいのに』

『ご自分と同じで仕事がバリバリできるタイプがいいのかな、それとも家庭をしっかりと守って笑顔で迎えてくれるほんわかした女性の方がいいかなあ』

などなど、そのほかにもたくさん。

そして必ず、最後につけ足される言葉がある。

『ねえねえ、若菜さんから聞いてみてよ？ だって、いつも一番近くにいるんだもの。話をする機会だって多いでしょう』

そんなこと言っただってねえ、言えるわけじゃないでしょう。「あんたの目の前にいるこの私を参考にしなさい」なんて。それって何様って感じだよ。

「今夜の梨実ちゃんも最高に美味しそうだなあ……さてさて、どこからいただこうかな？」

肩先から腕を伝って、いつの間にか脇腹に。彼は両手で私の身体の輪郭を辿っていく。おしゃべりな口元は、その一方でせわしなく素肌の上を這い回り、やがて胸先に止まって強く吸い上げる。

「……んんっ、……はあっ……！」

「いいよ、梨実ちゃん。もっともっと感じちゃって？」

絶え間なく続く強い刺激に翻弄されているうちに、彼の指先はある場所にたどり着く。「……きゃんっ！」

すでに恥ずかしくくらい濡れそぼっていると思われるその部分をそっとなぞられて、腰がわずかに浮いてしまった。

「……駄目、逃げちゃ」

そんなこと言ったって、こんなの我慢できない。

何度も何度も同じことを繰り返しているのだから、いい加減馴れても良さそうなものだけど、毎回我を忘れてしまう。

「僕は、梨実ちゃんに思い切り喜んでもらいたいんだ。ふたりでいることが最高に楽しいってことを、この身体にしっかりと刻みつけたいな。……わかっているよね、梨実ちゃんはもう、僕から絶対に離れられないんだよ？」

すっかり慣れ親しんだ指を深く受け入れて、私の中がさらに熱くなる。いったいどうなっているの？ 何本もの指が狭い中を暴れ回り、私の意識を遠い場所まで連れて行くとする。

「いつ、意地悪っ！ やめてっ、……やめて！ 駄目っ、今、そんな風にしたら——」

「……どうなるって言うの？」

伸び上がってキスをされると、ぎりぎりいっぱいだった感覚がすっと引いていった。

でもそれでホッとしたのも束の間、彼の指使いはさらに激しくなっていく。

「……あんっ、駄目っ！ だからっ、もういいって言ってるでしょう……っ！」

どうにかして、この熱さから逃れるすべはないものか。

悪あがきとは思いつつ、毎回それを必死に探し求めてしまう。すべて取り込まれてし

まえば楽になれるのはわかっている。そしてそうすることによって、今、手が届いていない場所に辿り着けるといふことも。

「……あ、はっ……！」

「ほらっ、……梨実ちゃん」

小さな子供をなだめるようなささやきに導かれ、私の身体が一瞬間に浮く。

「……あ、はっ……！」  
一瞬、意識が途切れたあとに、喉の奥から呻きが飛び出して来る。背筋がぞくぞくとして、なにか冷たいものに包まれそうな気分になったとき、ふわりと身体を抱き締められた。

「ふふ、梨実ちゃんって最高」

お互い裸だから、いろんなところがくっついて、すごくそばゆい。

オフィスでは爽やかクールなイメージで通っているのに、ふたりだけのときの吉田さんはすごく甘えん坊。やたらとちょっかい出して来るし、放っておくと拗ねる。その上、すぐに抱きついてくるし。

「ねえ……今度は僕も一緒に気持ちよくなっている？」

耳を甘噛みされながらささやかれて、身体がびくっと反応した。

「……ちよっ、ちよっと！ 駄目っ、もう少し待って」

うわわっ、まださっきの余韻が残ってるのに、勝手に再開しないで！  
「ううん、待てない。早く、梨実ちゃんの中に入りたいよ。……ほら、もうこんなになつてるじゃない」

「そっ、それは、吉、……いえ、和臣さんが——」

駄目、そんなところ触ったら、また感じちゃう。わかかってやっっているんでしよう、それにすごいしつこいし。

「ああんっ、……くっ、はあっ……！」

「もう入れていい？ ……入れて欲しい？」

彼の言葉は、質問ではなくて確認。それが証拠に、私が承諾の言葉を返す前に熱くて硬いものが入り口をツンツンと刺激してくる。

「ほら、梨実ちゃんもびくびくいつてる。嬉しいなあ、こんなに待っててくれたの？」

そう言いながら、彼は待ったなしに腰を進めてきた。

「……ああ……」

一気に奥まで貫かれて、その圧倒的な存在感に身体じゅうが反応する。一瞬、全身が熱く燃え上がったような感覚に陥った。

「やだなあ、もうイッチャった？ こんなに締めつけられたら、僕もたまらないよ」  
ちよつと意地悪に微笑み、鼻先にキスを落とされる。

「やっぱり離れたくないな。梨実ちゃんが一緒じゃないと、僕は元気になれないんだ」

——こんなときまで、調子のいい男なんだよなあ……

そう思いつつ、彼の首に腕を回してちよつどよい角度を作る。こういうことが自然にできるようになったのも、回数を重ねたからなのかな。

だけど、まっとうな神経でいられたのはそこまで。そのあとやってきた激しい衝動に、私はすべてを手放してしまう。

長い長い夜が、私たちの上を通り過ぎていった。

吉田さんと知り合ったのは秋の終わり。

偶然入った不動産屋で声をかけられたのが、そもそも始まりだった。

あのときの私はかなり悲惨な身の上だったと思う。

突然のリストラ、それにめげずに必死で頑張った末ようやく決まった就職先。やれやれと胸をなで下ろす間もなく、今度は入居していたアパートの大家さんから即刻の立ち退きを迫られた。

とにかく、次の部屋を見つけなくては。とは思いつつも失業している間にわずかばかりの貯金も底をつき、かなり厳しい状況だった。そうしたら、目の前に突然現れた彼が言ったのだ。

「君の望む物件をすぐに用意する、ただし夫付きで」

まったく、馬鹿も休み休み言えて感じだよ。もちろん、一蹴してやったわ。

なのに翌日、初出勤した派遣先でその男と再会してしまう。しかもあるうことか、私は彼の下で働くことになってしまったのだ。

その後も度重なる不運があり、気づいたときにはひとつ屋根の下。顔を見るだけどもかつく男と生活を共にする羽目になっていた。

しかも、プライベートもなにもあったもんじゃない。彼の姉姉とも鉢合わせして、ふたりの関係をすっかり誤解されてしまうし……結局、あれやこれやの結果、いつの間にかベッドも一緒に使う仲になってしまったというわけ。

出会って四ヶ月、事実上の恋人同士になって三ヶ月。

長かったような、あつという間だったような、自分でもよくわからない感じだ。

最初にちよつと説明したとおり、私たちが勤める会社も一時かなりヤバかったし。吉田さんはその危機を救うために走り回っていたから、私たちにはふたりの仲を積み重ねてきたという感慨もない。

……というか、まだ三ヶ月なんだ。

妹からはあのとおり顔を合わせるたびにせつつかれてるし、私の両親も吉田さんの兄弟も私たちのことをヤキモキと見守っているのが伝わってくる。

だけどね、本当のところよくわかってないんだ。

こうして一緒に暮らしているぶんには、それほどのストレスはない。そりゃ、掃除とか洗濯とか食事作りとかの手間はある。でもそんなのは、ひとりどふたりでたいした違いがあるわけでもないし。

ただ、吉田さんの本当の気持ちっていつのかな。そういうのがいまだに、あまり見えこない気がする。

年末年始に自分の実家へ帰省しなかったのは仕事が忙しかったからだろうけど、その後も再三に渡る姉姉の誘いを彼はのらりくらりと断り続けていた。だから思ったんだよね、もしかしたらコイツは急いで先に進みたくないのかなって。

まあ、それならそれでもいいような気がしたりもする。

私もようやく新しい仕事に慣れてきたところだし、もうちよつと今の職場で続けていきたいという気持ちもある。だから面倒ごとにはしばらく目をつむって、今を楽しめばいいかなとか。

うーん、だけどな。それでもなんか、煮え切らない。地に足がきちんとついていない宙ぶらりんの状態というの、少しは辛いものがあつたりする。私、なんだかんだいって男女のことは白黒はつきりつけたい、昔気質の人間なのかも。

そんなところに急浮上した、今回の帰省話。

いよいよ来るべきときが来たのかと、かなり身構えていた。それなのに、なんたる大ドンデン返し。どうして私が単身で彼の実家に乗り込まなくちゃならないの。

ふっと目が覚めたら、あたりは真っ暗。

まだ夜明けには早い。

それでも一度目が覚めてしまえば、いろいろ考えてしまつてふたたび寝つくことができなくなつた。

「そりゃ、お兄さんや暁子さんがついていてくれるとは言つてもなあ……」

ふと、そんな風に呟いたりして。私もなかなか往生際が悪いみたいだ。

「……ごめんね、梨実ちゃん」

すると、寝ているとばかり思っていた吉田さんが、もぞもぞつとこちらに腕を伸ばしてくる。

「気が進まないのはわかるよ、でも本当、兄さんは梨実ちゃんがウチの旅館を訪ねてくれることをとても楽しみにしていたみたいなんだ。だから、今回はただの旅行客ということで構わないよ。僕の実家がどんな場所なのか、客の立場でこっそり覗いてくれるのも楽しいんじゃない？」

「え……それで、いいんですか？」

この提案には、ちよつとびっくり。きちんとご実家の皆さんに素性をお伝えしてご挨拶申し上げなければならぬのだとばかり思っていた。

「うん、もちろん。兄さんも、梨実ちゃんに地元の食材を使った美味しい料理をたくさん食べて欲しいんじゃないかな」

「へえ……、それなら悪くない話かも」

気ままな週末のひとり旅を楽しんでこいつてこと？ うわつ、そういう話なら大歓迎だよ。

力いっぱい駄々をこねたあとだと、ちよつと恥ずかしかったりもするけどね。……ま、いいか。

「さ、もう少しだけ眠ろう。明日もお互い忙しいんだし」

こんな風に彼の腕に包まれて眠る生活も、いつの間にか当たり前前になつてる。心地よい鼓動、それを聞いているうちに忘れかけていた眠気がようやく戻ってきた。

一日飛んで、金曜日のオフィス。

いつもながらに課長不在のこのフロア、私は平野さんに呼ばれていた。

「はい、これで書類はすべてオッケーね。じゃあ、帰りに派遣会社はこの封筒ごと持つて行つてちょうだい。あとはこちらの書類に課長の判をもらつて……で、あなたの契約

更新手続きはすべて終了よ」

「ありがとうございます！」

「おおーっ、これでまた三ヶ月首が繋がった。そりゃ、更新確実とか言われてはいたけど、やっぱり決定までは不安だったよ。」

「若菜さんは勤務態度もいいし、次は是非六ヶ月で更新してもらいたいわ。今日、担当の方にこれをお渡しするときに、そのこともちらっと伝えておいてくれない？」

「はいっ、わかりました！」

「きゃーっ、嬉しい。こんなラッキーなニュース、吉田さんにも早速メールで知らせなくちゃ。」

「……とはいえ、彼ってメールだと別人のように素っ気ないんだよなあ。渡米したあとは、向こうに到着した旨の極短メールが届いたのみだし。」

「おめでどうっ、若菜さん！ 本当に良かったねえ〜！」

自分のデスクに戻ると、すぐに山口さんが飛んできた。

「これで、これからも吉田さん情報はばっちりだね。……ねっ、彼ってもう向こうに到着したんだよね？ 早速打ち合わせとかしているのかなあ」

「そんなこと、私が知るわけないでしょ？」

懲りないよなあ、山口さん。なんで、毎度毎度私に聞いてくるんだろう。

「吉田さんのスケジュールなら、私より平野さんの方が良くご存じでしょう。あ、今は販売部の応援だから、そっちの部署に訊ねた方がいいかな」

「えーっ、若菜さんに聞いた方が確実かと思ったのにな」

「なんだか今、意味深な眼差しを向けられたような。……え、違うよね？ そう思ったら、彼女はすぐにボンとひとつ手を叩く。」

「そうそう、若菜さん。平野さんのご機嫌の理由がひとつわかったよ。なんでもね、商店街の福引きで旅行券が当たったんだって。近々羽を伸ばしに行くんだーって、同期のお仲間と話しているの聞いたよ」

そこで山口さんは、ふうっとひとつため息をつく。

「きつと噂の彼と行くんだよねーっ。いいなあ、私もどこかに出かけたい……」

——別に、旅行だからって楽しいばかりとは限らないんじゃないかな。

思わずそう突っ込みそうになって、出かかった言葉を慌てて呑み込んだ。

「危ない危ない、今週末の旅行のことはオフィスの誰にも話してないんだ。だって、最初の時点ではいろいろな面で訳あり旅行だったし、ここまで直前になってしまうとかえって口にしにくい。別に隠すことでもないのに、なんとなくきっかけを失ってしまった。」「じゃ、私はそろそろ派遣会社に行かなくちゃ。じゃあね、山口さん。良い週末を」

「あれ、今日は派遣会社から直帰？」

「うん、急ぎの仕事は全部終わっちゃったし」  
 定時で帰れることなんてなかなかないものね。ここは景気づけに、旅行用に新しい服を買っちゃおうかな。

「ふうん、いいなあ。じゃあ、また来週〜！」

どんな週末が待っているのか、それを想像するとちよつと怖い。でも、とりあえず月曜になればまたこのオフィスで忙しい毎日が待っている。だから、きつと大丈夫。そのときの私は、当たり前みたいにそう信じていた。

## 3

季節外れの寒波が吹き荒れる空港に、私はひとり降り立った。

曇天の空は今にも泣き出しそう。やっぱりここって北国なんだなあ。

念には念を入れて完全防備。帽子にストールにコート、足下はブーツでしつかりガードしているものの、寒気にさらされた顔面は今にも凍りつきそうだ。

吉田さんの実家は新幹線では行きにくい場所にあつて、空港までの乗り換えの手間を入れても結局は飛行機を使うのが一番早いんだつて。フライト時間そのものは一時間ち

よつと。なーんだ、マンションを出てから二時間半くらいで現地まで到着しちゃったじゃない。

こんなすぐ着く場所なのに、吉田さんはどうしてあれこれ理由をつけては帰省を先延ばししてきたのかな。そんなに帰つて来たくないとか？ それかもしかして、思い出したくないような嫌な思い出でもあるの？

いやいや、まさか、彼に限つてそんなことはないだろう。

「ええと……たしか、吉田兄が迎えに来てくれているはず」

手荷物を受け取り、私は自動ドアから外に出る。そこには都会では考えられないほどの、広い平面駐車場があつた。

しばらくロータリーの前で呆然ぼんぜんとしてしていると、やがて目の前にボックス型のミニワゴンが止まる。色はホワイトでどこにでもありそうな感じ、でも私は車体の側面にでかかど書かれた立派すぎる筆文字に度肝を抜かれた。

『ようこそ湯の里へ！ 清澄旅館』

「ややつ、若菜さん！ ようこそいらつしやいました！」

そそくさと運転席から降りてきたのは、吉田さんのお兄さんである忠臣ただおみさん。伝統と格式を今に伝える老舗「清澄旅館」の帳簿を預かる若旦那だ。

この人、弟である吉田さんと目鼻立ちや長身なところは似ていたりするんだけど、全



体的に四角くてがっしりしている。現在の趣味は海釣りらしい。でも学生時代とかは格闘技系の部活とかやってたんじゃないかと想像してしまう。

だけど……今日は格好が変？

「お、お兄さん。いったいどうなさったんですか？」

モスグリーンのダウンジャケットの下からのぞくのは白い仕事着、それはどう見ても板前さんのコスチュームだ。いかにも「作業の途中で飛び出してきました」って雰囲気。まさか、いきなり板前に転職したとかじゃないよね。そんな話、吉田さんからも聞いてないし。

「あつ、いや！ これにはちいと訳が……それより、ささ！ 寒いですから早く乗ってください！」

かいたいしく助手席のドアを開けてくれたりして、なんか恐縮してしまう。

「荷物はどうして乗せますね！ では早速出発しましょう」

しかも、なんだかひどく急いでいるような。うーん、気のせいかな。

吉田さんのお兄さんとの出会いは、なかなか衝撃的だった。

あれは、私があのお兄さんとの出会いは、なかなか衝動的だった。前触れもなしにいきなりやって来たお兄さんと、私はお風呂上がりに玄関でばったり顔を合わせてしまったのだ。呼び鈴も押さずに合鍵を勝手に使うなんて、マナー違反もいいところ。まあ、勝手知つ

たる弟の家なんだから、それも仕方ないか。

顔も四角いけど頭の中も四角くきっちりしているお兄さんは、結婚前の男女がひとつ屋根の下で暮らしている状況に大激怒。すぐさま吉田さんを実家に連れ帰ると言い出した。あのとき、私が機転を利かせて彼を止めなかったら、カネヲ貿易の今もなかったことよ。

まあ、その後は最初の騒動が嘘のように気さくになっちゃって、いろいろと差し入れてくれたり、とても仲良くしてくれてる。すべてにおいて熱すぎて、かなりのオーバークションなところが多少気になるものの、基本的にはとてもいい人だと思うんだ。

そういうえば、お兄さんは料理もすごく得意。マンションにマイ包丁持参で訪れ、見事なお刺身の盛り合わせとか作ってくれる。本当は板場で働きたかったって、そう打ち明けてくれたこともあったっけ。

「良かったです、お迎えが間に合って。ちょっと出かけるのが遅くなってしまっただけ、ずいぶん慌てたんですよ。仕事着のまま出て来てしまいましたから、戻ったら新しいのに着替えないと。不衛生ですからね」

お兄さんは慣れた手つきでハンドルを回す。

しばらくは、ビル街が続いていく。県庁所在地でもあり、いろんな関係機関がここに集まっているみたい。

「住みやすそうないい街でしょう、空気も東京とじゃ全然違いますよ。水も美味しいし、そして極めつけに温泉もありますからね！」

いつもながら元気いっぱいなお兄さん、こちらがなにも訊ねないうちにどんどん説明してくれる。

「これから向かう我が温泉街は、それはそれは素晴らしいですよ。若菜さんもきつと気に入ってくださることでしょう」

そう言って豪快に笑う姿はいつもどおり。でも……やっぱり、どこか違和感があるような気がするんだ。無理に陽気を装っているような、そんな感じがする。

そして、その理由はすぐにわかった。急に口が重くなった彼が話してくれたのは、信じられない事実だった。

「……えっ、大女将おおかみと大旦那が不在って、それは……」

私は思わず、お兄さんの言葉を復唱してしまう。

ようするに、吉田さんのご両親が揃って出かけてしまっているというのだ。しかも私の滞在中にはお戻りにならないと。

「いつ、いやあ……面目ない。実は、今回の和臣の帰省が最高のサプライズになるようギリギリまで両親に内緒にしておいたんです。そうしたら、あっちにも私たちに相談もなく勝手に進めていた話があつて」

それが、地元の旅館組合から贈られた豪華三十日間のヨーロッパ旅行。長年組合の業務に深く関わってきた両親の結婚三十五周年を記念してくれてのこととか。

「でっ、でもどうしてそんな大切なことを……」

本当に訳がわからない。

「まあ、今では旅館の方はほとんど若いのので動かしている感じですからね。あの人たちは組合の仕事にばかり熱を入れているんです。ちょうど地元の大きなイベントが終わったばかりで暇な時期ですし。だから、前もって伝えなくても平気だと考えていたのですよ。それにしても出発は昨日の午後でしたから、あと一日ずれていればねえ……ほんつと残念です」

「は、はあ……」

それじゃ、私がなんのためにやってきたか、いよいよわからなくなっちゃったじゃないというか、やっぱ今回は、思い切ってキャンセルにしちゃった方が良かったんじゃないかなあ。不運に不運が重なったとはいえ、無理に強行する必要はなかった気がしてきた。……とはいえ、来ちゃったものは仕方ないか。

「じゃあ今、旅館の方はお兄さんの奥様がおひとりで切り盛りされているのですか？」

おーっ、いわゆる「若女将」ってやつですか！ お兄さんのお嫁さんって、いったいどんな方だろう。女優みたいいなすごい美人さんだったりするのかなあ。

「私、今回奥様にお目にかかるの、とても楽しみにしていたんです！」  
 ゆくゆくは同じ「嫁」という立場になるかも知れない方でしょう、余所者同士として  
 今から仲良くさせていたいただきたいなと思つてた。まあ、これは私の一方的な希望だけ  
 どね。

でも、私の言葉にお兄さんは首を横に振る。

「いえー、旅館の方は睨子が取り仕切つています。あれでいて、結構なやり手なんです  
 よ！ なにしろ、あいつは骨の髄まで旅館業務が染みついていますからね」

「えっ、……じゃあ、若女将は——」

「あ、そろそろ到着しますよ！」

——ちよつと待って。

お兄さん、今、私との会話を故意に打ち切つたでしょう？

私の視線をさらりとかわし、彼は急に饒舌じょうぜつになる。

「ほらほら見てください！ 昔ながらの風情がたいへん素晴らしいでしょう。城下町の  
 面影がそのまま現代まで続いているんですよ。ここまでの景観はほかではとても味わえ  
 ません！」

なんともわざとらしい説明だけど、その言葉に嘘はない。

柳の揺れるお堀端ほりぼた、ずらりと並ぶ年季の入った風情のある建物たち。そして、そここ

こから上がる湯けむりがいかにも温泉街らしい。どこからか漂ってくる甘い香りは、温  
 泉まんじゅうかな。

空港に降り立ったときには、日に日に春めいてきていた東京との温度差に驚いたけど、  
 この場所は立ちこめる空気までがほんのりと温かい。

「すごい、こんなにたくさん旅館があるんですか？」

目の前を次々と通り過ぎていく町並み。

土産物を売る店や飲食店もあるけれど、やはり一番頻繁に目に入るのは宿泊施設だ。

今がちよどチェックアウトの時刻のようで、大きな旅行カバンを手にした宿泊客が従  
 業員たちに送り出される風景があちらこちらで見受けられる。

「ええ、この地区だけでも五十は下りませんからね。あ、もちろん、規模は小ささまさまになりま  
 す。新しいのも古いのもいろいろです」

へええ、そうなんだ。すごいなあ。

具体的な数を聞かされても、私にはちんぷんかんぷん。ただ、ひとつだけ確信できる  
 のは、この界限かいがいに住んでいる人たちはかなりの確率で観光業に関わっているということ  
 だ。

「——あ、その先がウチの旅館です。大きな看板が出ていますから、すぐにわかるでし

よう」

お兄さんが指し示した方を見ると、通りの一番奥まった場所にひとときわ立派な風格のある門構えの建物があった。木彫りの看板には大きく「清澄旅館」とある。

「うわあ、……すごいっ！」

いかにも年代物って感じな両開きの扉、時代劇に出てくる武家屋敷みたい。その奥には白い石を敷き詰めた箱庭がある。美しく刈り込まれた庭木に石灯籠、池には錦鯉が優雅に泳いでいた。

この空間に身を置いただけで、日常とはかけ離れた場所に辿り着いた気がしてしまう。「でっ、では！ 自分は車を裏に戻してきます。中に暁子がいるはずですから、上がり口から呼んでください！ ではっ、若菜さん。またのちほど……」

そのときのお兄さんの立ち去り方に、私はもう少し疑問を感じるべきだったと思う。でもすっかり雰囲気呑まれている状態で、それどころじゃなかったんだよな。

そんなわけで緊張しつつも門の中へと入っていく。途中、池に泳いでいる錦鯉を数え、一匹いくらで売れるのだろうかと考えた。

「……ごめんください……」

自動ドアから中にはいると、そこは広々としたロビーになっていた。

ずらりと並んだスリッパ、中庭に面したラウンジ。そしてその奥がフロントのカウン

ターになっている。どこもかしこも完璧に磨き上げられていて、すごい。へええ、パソコンコーナーまである。やっぱり、伝統ある老舗旅館しにせでも情報化社会に対応しているんだな。

しばらく物珍しさにあたりをきよろきよろしていたら、奥の方からパタパタとせわしない足音が聞こえてきた。

「まあっ、若菜さん！ いらっしやい、待っていたのよっ！」

そして、登場したのは吉田さんのお姉さんである暁子さん。でも、いつもの都会風の装いととはまったく違う、しっとりとした着物姿だ。髪も綺麗に結い上げている。

「嬉しいわっ、本当に助かった！ ささ、こちらに。早速、従業員のみんなにあなたを紹介しなくちゃ！」

「えっ、ええと……」

ちよつと待って、暁子さん。

今回の私は宿泊客としてここに来たんだから、まずはチェックインとかそっちの方が先じゃないだろうか。従業員に紹介？ なんでなんで、そんなことされなくちゃならないの。

「でっ、でも私——」

「ほらあ、早く！ 時間がないんだから……！」

やっぱり、なにかおかしい。さっきのお兄さんといい、なにをそんなに急いでいるの？私があまりに要領を得ない反応をしていたからなのだろう。長い通路をいくらか進んだところで、暁子さんはようやくこちらを振り返った。

「あの、若菜さん。兄から今日の話は聞いていますよね？」

「え？」

思わず首をかしげたら、彼女は「ああ、やっぱり」という顔になる。

「もう、車の中できちんと説明しておくように言ったのに！ 本当にウチの男どもは駄目ね！ 揃いも揃って、頼りにならないっつらないわ……！」

そのとき、目の前の障子が開いて、中から恰幅かつかくの良い着物姿の女性が出てきた。五代半ばくらいかな。

「あーっ、暁子様！ そろそろ緊急ミーティングを始めないと」

もちろん、彼女は私の姿を見て、とても不思議そうな顔になる。

「あ、小梅さん。紹介するわ、こちら東京からお出でになった若菜さん。和臣の勤務先で部下として働いている方よ。今回、私たちの窮地きゅうちを救うために、助っ人としてわざわざ来てくださったの！」

「へえーっ、和臣様の……」

小梅さん、と呼ばれたその人は、私を品定めするみたいにじーっと見つめてくる。

だけど、そのぶしつけな眼差しなんて気にしている場合じゃなかった。

「あっ、暁子さん！ なんですか、その、助っ人って。私、そんな話、全然聞いてませんよ……！」

お願いだから、人のことを会話から置き去りにしないで欲しい。

それなのに暁子さんときたら、しれっとした態度で言う。

「聞いてなくて当然でしょ、兄があなたになにも話してくれなかったんだから」

そして彼女は、いつもの高圧的な態度になる。

「あのね、これはいまだかつてない緊急事態なのよ、若菜さん。数日前から、この温泉街では季節外れのインフルエンザが流行してしまって、今日は従業員の半数近くが休んでいる状態なの。どこの旅館も皆同じような状態だからほかから人員を借りるのも無理。いろいろ当たってみたんだけど、これ以上はどうにもならなくて。だから、こうなったらあなたの手でも借りようという話になったのよ」

「は、はあっ？」

「正直、ど素人でも構わないから。いいわね、とにかくこの土日をしつかり乗り切らないと、老舗旅館の名が廃すたるというものよ」

こういうときの暁子さんは、半端なく怖い。とても口答えなんて許される感じじゃない。「で、でも！ 私、旅館の仕事なんてやったことありませんし。お手伝いしても、かえ